

Kappa Novels



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。このほか、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 逮捕士議代

昭和42年8月1日 初版発行

検印廃止 ￥310

著者 佐賀 潜

東京都中央区銀座6の4
交詢社ビル5階502号

発行者 神吉晴夫

印刷者 磨田照雄

東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sen Saga 1967

代議士逮捕

佐賀 潜



カッパ・ノベルス

目次	
第一章	大蔵大臣の椅子 いす
第二章	代議士高木長治 たかぎ ちやうじ
第三章	雪国の山河と女
第四章	悪銭を追う政治
第五章	決算委員会の顔
第六章	F県知事の選挙
第七章	藤本房江 ふじもとふさえ の告発
第八章	三億円恐喝 きやうかつ 始末
第九章	雪国に消えた女
231	197
170	139
115	86
61	34
5	

本文のイラスト

中^{なか}
島^{じま}

憲^{けん}

第一章 大蔵大臣の椅子

1

大阪天王寺——

阪和電鉄の天王寺駅は、乗降の客でごったがえしていた。正月も松が取れると、晴着姿が少なくなり、酔客も姿を消し、せわしげに働く人々であふれている。

午前九時発の和歌山行準急が、八分どおり満員となった乗客を呑んで発車した。電車は、ときどき、気の遠くなるようなサイレンを鳴らしながら、冬枯れの田園に、轟音を残して疾駆していく。

前から二つ目の車両に、無帽の小柄な男が乗っていた。身長は、一メートル六十にも足りない小男で、のびした手で吊輪をつかみ、斜め前方にすわっている白髪の男を睨んでいる。その眼に、無気味な光がある。窪んだ眼は、細く小さいが、眼球を動かすたびに、犯罪者のよ

うな冷たい光を放つ。

が、身なりは、人相とそぐわぬほど立派だ。一見して外国製とわかるゆつたりした背広を着て、ブルー系統のネクタイも渋味がある。黒い薄手の外套も、どうやらベネシアンらしい。

男の名前を、園部銀四郎という。彼は、大蔵大臣中島映気の私設秘書である。国会議員には官費の秘書がつくし、大臣には何人かの秘書官がつく。その他、大物政治家家となると、五人から十人もの秘書と称する取巻き連中を抱えている。

園部銀四郎は、そうした取巻き連中の一人にちがいないが、大物政治家の私用を担当する小者とはちがう。年はまだ三十五歳だが、十人もいる中島の秘書たちの中でも、別格あつかいをされていた。

しかも、他の九人の秘書たちすら、園部の役割りを知らない。ただ、わかっていることは、中島が園部を、他の秘書たちより重用していることだ。

園部が、大臣室へ顔を出せば、次官、局長でも、秘書官でも気をきかして座をはずす習慣になっていた。中島の選挙区は、郷里でもある北陸のF県だが、日本海に面した三崎市にも、東京の港区麻布今井町にも、中島の妾

宅があるが、そこへ出入りできるのは、秘書たちの中でも園部銀四郎だけだった。

中島映気は、ジャーナリズムのゴシップを、異常なほどに警戒していたからだ。女性関係のスクandalだけでも、政治家としての生命にひびいてくる。週刊誌に、妾宅の写真を撮られ、発表された政治家が、その次の選挙で落選した例もある。

まして、後ろ暗い金を受け取ったらしい——という噂でもばらまかれたら、四、五年の間は、政治の陽のあたるところから、はずされてしまう。が、大物政治家になるためには、金を集めねばならない。財界にパイプを通しておき、ことあるたびに金を集めている。集めた金は、子分の代議士たちに、ばらまかれる。

代議士は、歳費、委員手当その他で月収四十万円ほどの収入がある。手取りは、おおむね三十万円くらいだろう。これでは、自分の選挙区の面倒をみる資金は出せない。結局、親分から援助をしてもらわねばならない。

中島映気は、憲民党の中でも、工藤陸郎派に属していた。現首相本多正人の次は、工藤陸郎だ——との噂が高いが、噂だけで海のものとも山のものともわかっていない。

中島映気は、もし、工藤が内閣首班となれば、次の後継者と見られていた。三年先か、五年先かわからないが、中島が憲民党の総裁の座にすわるのは、それほど遠いことではない。

中島は、その日の準備のため、金を集めていた。

政治担当の新聞記者たちの噂によれば、中島はすでに、私財三十億円——といわれていた。中島の金集めの一部を担当しているのが、園部である。

園部は、今、斜め前方にいる白髪の男を、横眼で睨みながら、へあいつは、なんの目的で鷹が池へ行くんだろう。どうせ、中島のケツを洗うためだろうが、問題はすでに、一年前にすんでいる。何をほじくろうと、ミスはねえはずだ——と考えていた。

白髪の男は、天堂史郎といい、衆議院決算委員会の調査員である。天堂は、決算委員である高木長治代議士の命をうけて、調査の仕事を担当している。戦時中の特高警察畑で育ったと言われているだけあって、天堂の調査は、表面だけでなく、底に隠れている事実を掘り出すのがうまい。

どこの県へ行っても、一人や二人、旧知の部下がいて、彼らの協力のもとに、隠されている不正を天堂は必

ずほじくり出してくる。高木長治の決算委員会における発言は、いつの場合でも、ジャーナリズムを沸き立たせた。野卑な語調で、遠慮会釈なくがなり立て、答弁に立つ政府側を、立ち往生させることもしばしばだった。

『決算委員会の爆弾男』とさわがれている高木の追及の資料を提供していたのが、調査員天堂史郎である。園部は、数日前、大蔵大臣室で中島と会ったとき、密命をさすけられた。

「高木長治が、どうやら大阪の鷹ガ池を嗅ぎつけたらしい。というのは、天堂史郎が、家屋公団へ出かけ、昨年度の用地買収のうち、例の鷹ガ池二十万坪（六十六万平方メートル）の書類のコピーを取りよせたんだ」

中島は、いつもの癖で、園部にぎょろりとした眼を向け、つぶれた声をかけた。

「鷹ガ池は、なんにも尻を洗われるようなことは、ありませんよ」

園部は、中島のちょび髭のある顔をみつめた。彼は、強がりと言ったものの、へいやな奴が出てきたもんだと思つた。どんな相手でも、中島の政治力を使って、押しつぶすことができたが、決算委員会の天堂だけは、手に負えない相手だからだ。

那須の国有林払下げ問題を、天堂が調べだしたとき、憲民党の実力者川瀬三郎と中島映気が、協力して天堂に圧力をかけたことがある。川瀬も中島も自分の支配下の会社名義で、国有林払下げのうまい汁を吸っていたからだ。が、天堂は屈服しなかった。

ところが、この問題は、川瀬が自分の派閥に属する高木長治を丸めこみ、決算委員会での発言を封じてしまったので、ことなきを得たことがある。

「油断は禁物だな。当分、天堂を見張っていないけりやならんぞ。どうせ、高木長治とぐるになって、ボロを掴もうとしとるんじやろ。天堂の調査の進みぐあいによっちゃ、先手を打たねばならんからな」

園部は、中島の腹の中はわかっていた。叩けば埃が出る。その埃が明るみに出れば、中島映気の命取りになる。園部は、それがよくわかっていた。

「さっそく調べてみましよう」

「石橋を叩いて渡る——これがわしの生き方だからな」中島は錆びた声で笑った。その笑いは、いつものように自信に満ちた笑いではなく、不安をまぎらわす笑いのようだった。

園部は、決算委員会の事務局へ手をまわし、天堂の行

動をチェックしていた。事務局の中に、中島映氣の息のかかっている者が、何人かいたからだ。

天堂が、前日、午後の列車で東京を発つと聞くと、園部は、その後を追ったのだ。天堂は、大阪ホテルに泊まった。翌朝、八時をまわったころ、ホテルを出て、タクシーで天王寺駅へ着き、九時発の和歌山行にのりこんだとき、園部は、はつきりと天堂の目ざすところが、鷹ガ池だときとったのである。

案の定、天堂は、和泉駅で下車した。園部は、三、四十メートルの間を歩いて、後をつけた。白髪長身の天堂が、細身のステッキを握り、駅前広場へ出た。天堂は、広場を横切ると、喫茶店へはいった。田舎町にはめずらしいくらい大きな店で、みどり屋というサインボードが出ていた。

園部は、煙草をくわえ、ライターの火を移すと、天堂が消えたドアを見守った。タクシーが数台停まっていた。園部が、二本目の煙草を吸いかけたとき、ドアが開いて天堂が出てきた。ところが、意外にも五十がらみの、黒い洋装の女と肩をならべている。園部は、天堂が、その女と待ち合わせていたものと察した。

二人は、戻ってくるとタクシーに乗った。車が走り去

る方向は、まぎれもなく鷹ガ池だった。園部は、タクシーを拾うと、「すまんが、あのタクシーを追ってくれ。気づかれんように、間を歩いてくれ」と言つて、運転手に千円札一枚を握らせた。

この道は、河内長野市へ向かっている。そこから左折すれば堺市にいたり、右折すれば橋本市にいたる。運転手は心得て、前方の車から五、六十メートルの間を歩いて、走っていた。

園部は、女の姿が気になった。後ろの窓に映る二人の姿は、左右に距離をおいてすわっている。天堂には、女房はいないはずだ。愛人にしては、女が年を取りすぎている。大柄な肉づきのいい女で、堂々たる貫禄があった。天堂は、なんの必要があつて、女と同行するのだろうか。園部は、考えたが見当もつかなかった。

前方に峨々たる山系が見えてきた。左が金剛山地、右が葛城山地である。その山裾のなだれるところ一帯が河内平野である。

道は、父鬼街道の三差路にさしかかった。左手に渺々とひろがる水面が見えてきた。低い灌木の間から、冬陽をうけた小波が、銀光をかがやかせている。鷹ガ池である。

天堂の車は、ゆつくりと池をまわりだした。園部は、灌木の間に車を停めると、「待っていてくれ」と言いおいて外へ出た。天堂も下車したらしく、二人の姿が、木の間がくれに、山裾へ向かって歩きだした。

園部は、歩度をはやめ、その後を追った。灌木の林が切れ、一面の枯れ草原となった。園部は、自分の足元に気をとられ、二人の姿を見失った。湿地帯で、うっかり歩いていると、靴が土の中へめりこんだ。体重で踏みこんだ後から、水が浮き上がってくる。灌木地帯と湿地が入り交り、広大な平地となっている。

園部は、歩行の困難さに眉をしかめ、「こんな土地……だだっ広いだだけだ。とても住宅には向かな」と、低い声でつぶやいた。園部の頭の中に、鷹ガ池二十万坪を日本家屋公団に売りつけた経過が浮かんた。

この土地は、昭和三十二年に、日本住宅建産株式会社、坪当たり二千円、二十万坪合計四億円で買い入れた。日本住宅建産は、いわゆる建売住宅を建設し、これを月賦で販売する会社である。この会社は、資本金三億円、その全株を、中島映気が持ち、昭和二十七年以来社長をしていた。株主名義は、二十数名に分散されているが、いずれも中島の腹心の者たちばかりで、オーナー

は中島だったのである。

会社は、三年ばかり好況がつづいた。売上げも年間五百億円を突破し、利益を隠すのに困ることもあった。会社が鷹ガ池の二十万坪を買ったのは、利益金の処分に困っている時期だった。

中島は、現地を調べてから、——湿地帯が多いが、灌木地帯は住宅地になる。その比率が半々とみれば坪当たり四千円で買うことになる。堺市を中心に、工業地帯が発展すれば、隣接地に住宅地が必要となる。安い買物だろう——と考えた。

ところが、この見込みはずれた。人間が住むためには水を必要とする。燃料はプロパンで十分まに合うが、水はタンクに入れて運んでくるわけにはいかない。水道が必要だ。が広大な湿地帯と沼地のため、水道の敷設は困難だった。かりに敷いたとしても、莫大な経費が必要となる。

井戸水を利用する方法を考え、数カ所でボーリングをやったが、いくら掘り下げても、濁水だった。とても飲料に適するものではない。中島は、こうして、四億円払った二十万坪を、無為に抱いていたのだ。

間もなく不況がやってきた。朝鮮動乱の恩恵をうけた

神武景氣が去ると、産業界は金詰まりに喘いだ。日本住宅建産はたちまち赤字を出すようになった。

中島は、この会社を東亜通産株式会社の社長岡野健三に、六億円で買ってもらった。つまり、資本金三億円の全株を、額面金額の二倍の値段で売りつけたわけだ。赤字つづきの住宅会社の株を、額面で買うことさえ、納得できないのに、倍額で買うのは、気持ちがいい沙汰である。が、中島と岡野の間に、堅い約束があったからだ。

そのころ、中島は、自分の政治生命について明るい希望を持っていた。世間は、中島を工藤派の四天王の一人と見ていたし、重要ポストで入閣するメドもあった。だから、赤字会社を抱えていて、ボロでも出せば世論から叩かれることを懸念し、岡野に会社を買ってもらったのである。

中島は、岡野を麻布今井町の妾宅へ呼びだし、談笑のうちに口を切った。

「六億は、ちと高すぎるな」

岡野は、禿げあがった額を、平手で撫でながら、微笑をうかべた。

「なあにちょっとした間だ。一年以内には鷹ガ池を家屋公団に買わせるよ。もちろん、六億の投資が、たちまち倍

になるような値段でな」

「ま、ほかならぬあんたの頼みだ。引き受けよう。その代わり、公団のほう、うまく頼みますよ」

岡野は、鷹揚に笑った。

中島は、間もなく、鷹ガ池の土地を、唐沢重吉に買わせた。唐沢は、憲民党の副総裁中野満木をバックに、十年足らずの間に、財界にのり出してきた人物である。伊豆の下田にホテルとゴルフ場をこしらえ、東京都内にも、ホテルを二つも経営していた。

唐沢から、大洋綿業株式会社へ買わせ、さらに日本家屋公団へ買いとらせた。中島は、第二次本多内閣の大蔵大臣の要職にあり、政治力によって、一連の売買を成功させたのだ。最初、中島が買ったときは、四億円だったのに、公団が入手したときは、二十億円、五倍にはね上がったのである。

が、公団は、二十億円もの大金を投じながら、一年も経つのに、いっこうに、住宅建設の気配すら見せていない。水利が悪い——ということで、建設計画は棚上げになっ

ていのである。

園部銀四郎は、これら一連の取引きについて、中島の命をうけて暗躍した。中島は、六億円をふところに入れ



たほか、利益の配分として、岡野から四億円を召し上げている。岡野は、唐沢重吉や太洋綿業に合計一億円の手数料を払い、日本住宅建産の買取り資金六億円、中島への分配金四億円を引いても、九億円の利益を掴んでいゝる。不動産売却にともなう税金は、住宅建産の赤字の累積を埋める経理上の処置を取ったため、課税されなかったのである。

園部は、今、土にめりこんだ足を引きあげながら、取引きの経過をかえりみた。どう考えても、非合法のボロはまったく見えない。が、この問題をほじくる側から見れば、一連の取引きをカムフラージュと判断するだろう。つまり、中島映気がオーナーである住宅建産が、四億円で買入れた住宅地に不向きな土地を、家屋公団に、二十億円で売るため、間に数人の買い人を、介在させたにすぎないからだ。

園部は、このからくりを、天堂に見破られたら、一大事になると思っていた。彼は灌木の茂る池のほとりに出て、あたりを見まわした。天堂も、女の姿も見あたらなかった。

園部は、煙草をくわえた。

風があつて、寒い。園部は、外套の襟を立てた。その

時、左手の奥のほうから、「園部さん、ごくろうさんです」と、低いが力のこもった声がした。園部は、反射的にふり向いた。

灌木の茂みの中から、天堂の細長い顔が浮かび上がった。同行の女の肥った顔が、わずかに白い歯をみせた。

園部は、息を殺し、二人を睨んだ。

天堂の皺をきざんだ頬がゆるみ、灌木を押しつけ、近寄ってきた。

「園部さん、いったい、なんです。鷹ガ池の二十万坪を、また、公団から買戻してもやるおつもりですか」

天堂は、やわらかく語りかけると、ステッキについて立ちどまった。

「やあ……あなたこそ、お役目ごくろうさんです。で、調査はすんだんですか」

園部は、下腹部に力を入れ、強いて平静をよそおった。が、足の関節に、力がいらず、ふらつく感じた。

「こちら土地会社の藤本房江さんです。公団が、せつかく二十億もの大金を投じながら、宝のもちぐされじゃ、国家的に見ても大損害……公団が要らんもんなら、買ってもいいというんで、ついでにお連れしたまでですよ」

天堂の言葉は、のびやかで、敵意は感じられない。旧

知の友人に語りかけるような、快いひびきがある。園部は、天堂が自分の名前を知っているのにおどろいた。今まで、ただの一度も会ったことはないが、天堂は、電車の中で俺が尾付けているのに気づいていたのだろう。天堂が、自分の立場と役割りを見通していると思うと、中島映気が、天堂を警戒する理由がわかるような気がした。怖い男だ——という思いが、園部の頭の中を掠めた。

園部は、大きく息を吐き出した。

「ぼくのほうも、天堂さんのことは知ってますよ。高木代議士の下働き……たいへんでしょうな。決算委員会における勇猛ぶりの背後に、天堂史郎という調査マンが、敏腕をふるつとること……承知してます」

園部は、ことさら語尾に力を入れ、顎を引き、天堂に鋭い視線を当てた。

「ほう、ご存じでしたか……こりゃ恐れ入りましたな」

天堂は、口辺をゆるめ、言葉少なく答えると、池面に視線を転じ、まばたきもせず見据えている。白髪が風になびき、瘦せた頬にまつわりつく。

その表情は水のように澄んでいる。そこに園部がいるのを無視しているのか、感情の起伏が看取されない。園部は、食い入るように、能面の翁に似た顔を睨んだ。

「あなたが居なけりや、高木代議士は手も足も出ないはずですな。いや、あなたが居るからこそ、高木代議士は、金儲けができる——そんな見方をする人もあるようですが……」

園部は、相手から受ける得体の知れない重苦しい威圧を、押しかえすため、天堂の痛いところを突っ込んだのだ。

「私の……関知するところじゃない」

天堂の二重瞼ふたえまなの眼が、きらりと光り、小波立つ水面の銀光が映った。天堂の顔が、静かにまわり、園部に澄んだ眼を当てた。

「いったい、天堂さんと高木長治とは、どんな関係にあるんです？ あなたは高木代議士の命をうけて、いわゆる調べをやっているんじゃないんですか」

園部は、下腹部に力をこめた。

「彼は代議士……私は調査員……ただ、それだけだ」

天堂は、冷たい笑いを浮かべると、連れの婦人をかえりみ、「藤本さん、この機会に、園部さんを通じ、この土地の払下げを、大蔵大臣に頼んでおいたらいかがです」と、声をかけた。

藤本と呼ばれた女が、軽く頭を下げ、「あたくし、こ

んな仕事をいたしております」と言つて、鰐皮わにかわのハンドバッグから名刺を取り出し、園部にさし出した。

園部は、名刺を受け取った。富士宅地造成株式会社、代表取締役社長藤本房江となつていて、会社の所在地は、東京都下、調布市となつてゐる。

「中島さんに、ぜひ、お伝え願ひたいのです。鷹方池二十万坪を、このまま持つていたら、必ず問題になりますわ。人間が飲む水を通すことができないんですから……問題にならないうちに、払い下げてしまつたほうが無難じゃありません？ 国会で取り上げたら、中島さんの政治生命が、黒い霧にまき込まれるんじゃないでしょう。園部さん、六億円なら買いますわ。日本住宅建産が、最初に、唐沢重吉さんにお売りになつた値段……もっとも、公団へ売り込むための、カムフラージュだったとは思いますが、二十万坪、六億円ならよろしいんじゃないのですか？ このままじゃ、永久に家は建ちつこないのですから」

藤本房江の語気は、ねちねちとからんでくるような言い方だった。園部は、答えず、生唾なまつばをのみこんだ。

「園部君、ま、大臣によろしく……いずれ東京へ戻つてから、ゆっくりお会いしませんか。きみも私に興味があ

るように、私も、園部君に興味を持ってるわけですよ。
よろしく」

天堂は、女をうながすと、灌木の中の道を歩いていった。園部は、二人の姿が、茂みに没するまで眼で追いかけていた。

2

園部は、その日、午後になって帰京すると、大蔵省の大臣室へ電話をかけた。第二秘書の倉田清信が電話口に出た。

「大臣は、目下閣議中です。終わると、五時から東京殖産の社長水原さんの結婚披露宴……それが終わるのが、たぶん、八時半ごろだと思いますが……」

倉田は、大蔵官僚の中から、中島が選んだ秘書である。年は、三十八歳だが、東大出の秀才で、主計局畑を歩いていた人物で、次官はまちがいないと言われている。その倉田でさえ、年下の園部に対し、いんぎんな口のかき方をする。園部は、倉田の返事をきくと、受話器を切り、「しようがねえ。明朝、今井町へ行ってやろう」とつぶやいた。今井町とは、中島の東京の妾宅である。

園部は、ダイヤルをまわし、東亜通産株式会社の社長室を呼んだ。電話口に、沼尻八重の鼻にかかった声が聞こえてきた。

「なあんだ、銀さん……今どこ？」

「東京駅だよ。大阪から戻ったばかりだ。社長いる？」

「いるわよ」

「これから訪ねてもいいかって、聞いてくれ。話は、十分か十五分ですむんだが」

「ちよつと待って……」

園部は、ちらりと八重の顔を思い出した。あとで、誘ってみるかな——と考えた。電話が、ひびいてきた。

「すぐなら、お会いできますって……終わったら私の部屋へきて……」

「なんだい……話でもあんのかい」

「今夜……会いたいからよ。うふふふ」

園部は、八重のびちびちした肌を瞼の裏にえがき、「承知……」と短く答え、電話を切った。

園部は、タクシーを拾い、有楽町へとぼした。国電有楽町駅の裏側に、東亜通産の本社ビルがある。戦前からある古いビルを買い取り、ほとんど改装もせず使っている。駅前一带は、歓楽街のターミナルとなり、びっしり

と飲食店が立ちならぶまっただ中に、窓の小さな古風なビルが、付近の雰^{ふん}囲^い氣^きにそぐわぬ景観をつくっている。

東亜通産株式会社——と、正面入口のドアに、金文字で書かれてあるが、通行人のほとんどは、その会社が、なんの会社であるかを知らない。

が、社長の岡野健三の名前は、知っている人が多い。

岡野は、大正四年生まれだから、まだ、五十歳になったかならぬかの人物だが、東亜通産を母体とした傘^{さん}下^かの会社は、二十社をこえていた。東亜観光株式会社は、関東一円を路線とするバス会社である。東亜交通は、東京のタクシー会社の中では、トップクラスだったし、東亜航空株式会社、東亜電鉄、東亜土地、東亜ミシン、東亜タイヤなど、有名会社をコンツェルンの中に抱えている。

彼の私財の総額は謎^{なぞ}とされていて、誰も本当の額を知らない。数百億円とも、千億円をこえるだろうとも言われている。

岡野健三は、東京都下青梅^{おうめ}の葉村^{はむら}の水のみ百姓の子として生まれた。学歴は小学校しか出ていない。百姓仕事をやっているうちに、徴兵検査に合格し、シナ事変に従軍し、歩兵軍曹となって帰還した。

岡野は百姓をきらい、東京へ出ると、外国自動車の販

売会社の店員となり、やがて独立して東亜自動車興業株式会社をこしらえた。

この会社は、陸軍の自動車の部品を販売し、かなりまとまった金を擲^なんだ。

岡野が、本当に大きな儲^もけをふところにいれたのは、終戦直後の混乱期だった。が、彼がどんな方法によって儲けたか——岡野も語らなかつたし、彼の側近も知らない。

園部は、まったく偶然の機会から、終戦後の二年間の岡野の行動を推定することができた。園部は、そのころ悪戯^{いたづら}ざかりの少年で、世田谷^{せたがや}のS学園の中等部に通^{かよ}っていた。クラスの中に泉谷隆^{いずみやたかし}という仲のいい友だちがいた。

園部は、三軒茶屋^{さんげんぢや}にあった泉谷の家へ、よく遊びに行っていた。泉谷の父、泉谷仙助^{せんすけ}は自動車の販売をやっているとの話だった。昭和二十二年の秋、修学旅行へ出発する前夜、園部は、泉谷の家に泊めてもらった。園部の家は、当時、台東区^{たいとうく}にあったので、午前六時出発の時間に、間に合わないことを怖^{おそ}れ、泊めてもらったのだ。

その夜、八時を過ぎたころ、三人の私服の刑事がやってきて、窃盗罪の容疑で、泉谷仙助を逮捕していった。